

2015年・ドラマシアターども便り(札幌近郊演劇の現場から)

著者	安念 優子
雑誌名	Probe : 舞台芸術通信
号	10
ページ	61-62
発行年	2016-02
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00002140/

ン側が負担するので、お金をかけた演劇制作に取り組むことができる。

しかし演劇シーズンとは、過去に上演され評価の高い作品をもう一度見たいという声に応えて再演のみで構成される。観客に対して一定の完成度を保証し、実績のあるものを提供することによって演劇の社会的位置を築こうという狙いがあるからである。毎回の演劇シーズンを、幅広い観客の期待に応えて、多様性のあるバランスのとれたラインナップで整える必要がある。したがって新たな挑戦や、発展途上のものを取り上げることは難しく、これはまた別の支援枠が必要になってくる。

二〇一五年 ドラマシアターども便り

一九八一年に立ち上げたドラマシアターども、今年で三五年になります。(不思議に、札幌では駅裏八号倉庫が始まる同じ年でした。)

市内を、どもⅠ・Ⅱ・Ⅲと移転し、旧郵便局のここにてⅣになり一〇年目を迎えています。レンガ建ての一階(半地下)は、平台や道具・楽屋・印刷・コピー機・安念の仕事部屋、暖房の薪ストーブと台所。二階は小劇場(七〇人収容)と喫茶・ギャラリー。三階は主宰の私達の夫婦の自宅。

一月初めは二六年になるリサイクルカレンダー市、

もう一つの課題は、年二回各一カ月の演劇シーズンの根幹を担い、札幌市民のみならず観光客をも魅了する文化催事として成立させる創造とマネジメントの力量をいかに蓄積するか、である。演目の枯渇を回避して、いかに発展的な取り組みを継続できるか。その対策のひとつが、二〇一六―冬からスタートする「レパトリ―作品」の上演である。『亀、もしくは・・・』は、二〇一二―冬の第一回演劇シーズンで上演された作品である。歌舞伎十八番のように、欧米の劇場が営々と蓄積しているレパトリ―作品のように、何度見ても面白いスタンダード作品をいかに生み出していけるか、それが演劇シーズンの今後を拓く鍵のひとつである。

江別・ドラマシアターどもⅣ 安念優子

五〇〇人からの人出があります。

(収益は、チエルノフィリの子供の保養への寄付から、現在は福島原発避難の子供達への活動に寄付)

二月は、江別の多喜二祭。

三月は一カ月間、脱原発芸術祭、五年目。七〇人前後の出展・ステージでの「つくるみ劇場」。

三月・七月・十二月は、酪農大ブルーグラスのコンサート。

春と秋は、大学の落研からプロになった林家卯三郎が大阪から。

一二月は五〇団体以上が出演参加するども興業（芝居・音楽・映画・ダンス。ジャンル問わずの二〇分）。年末は、三五年間、恒例の三〇日の餅つき。

二月、七月、八月と自前劇団の公演。
ワークシヨップ・月一の飛び入りライブ、絵画教室・貸しスペース。

道内、内地や海外からジャズ他、民族音楽などのコンサート・コラボレーション、芝居公演、映画上映。

昨年は、親子で「せんそうのおはなしへいわのおはなし」——わたしたちにできること——きくこと、しること、たべること——を子育て中のお母さんお父さんたちと取り組みました。ギャラリーでの慰安婦パネル展や、映画会と同時期でした。東北避難者の方が、毎年八月に家族で食べていたすいとん（団子汁）をつくり、一〇〇人近い親子のみなさんと昼食を楽しみました（国会の安保法制の強行採決の時期と重なり、世代を超えた会話が生まれました）。

三・一一以後、原発避難者の自助グループと支援者とのつながりが深まり、小さな子どもたちも参加する影絵や、お父さん達のバンドなど参加型の取り組み、マルシェな



12月30日 恒例の餅つき



7月31日～8月2日 カゲボウシ
（劇団ドラマシアターども）



10月17日 ヘンテコフェスティバル
（ドラマー石川さんを迎えて）

ど、多彩に拡がって来ています。
こうして一年を振り返ると、私達のこの空間は、地域の暮らしの中の劇場だなあ……とあらためて感じますね。特にこの二、三年は、創る・表現・食べることを大事にしてきたように思います。
どもの運営の下支えは、舞台・客席作りの力仕事から制作周辺を、歴代の劇団員が担ってきました（若者の力が無いとフリースペースは動けない……）。
今年も近くの外輪船も含め、子供たちが参加する企画や、日々の暮らしが元気になりネットワークが生まれるイベントを、創りだしていきたいと思います。
なによりも、私達の人生の自由のために！ 未来に生きる小さな人たちのために！！